

寿楽委員の質問に対する回答

吉田 英一

今回の説明は、プレゼンの中でも触れたが、地層処分の「正当化」のために行ったのではなく、地下環境についてどこまで何が分かり、何が課題として残っているのかについて、公開した科学的知見に基づいて紹介したものであり「判断」を述べたものではない。科学的知見は、あくまで判断の参考とされるものであり、研究者の役割は社会的（あるいは政治的）に活用可能な知見をできるだけ客観的に提示する（務める）ことだと考えている。また研究者自身、「科学的知見」と「判断」を混同したメッセージを発するべきではなく、例えば地球科学関連の複数の学会においても、「混同」されるような議論がなされないように、できるだけ関連するセッションを持ち、科学的知見に関する研究者間での意見交換を継続しているところである。とくに指摘されているように「腑に落ち」「好ましさ」と「信頼」を醸成するためにも、科学的知見の蓄積が不可欠であり、その知見を含めて、「専門的見地からみた妥当性以外のさまざまな要素についても検討」することが重要と考える。

地層処分が、「社会が（現時点で）処理できない課題を多くはらんでおり、社会的議論に時間と苦労を要している」という理解に異議はない。また、「放射性廃棄物処分を科学技術に係る他の多くの問題と質的に区別する」という考え方を特に否定はしない。一方で、自然科学における地球を対象とした、例えば温暖化や自然災害（減災）などの科学技術に関わる、同様の‘地質環境の時空間的課題（問題）を取り扱う’という意味において、特段地層処分の問題だけが極端に異質であるという立場をとる必要性は感じていない。もし社会学的に‘科学的知見の不足’に伴う故に「異質」と感じるものがあり、それが「苦労を要している」要因となっていると考えられる部分があるのであれば、その部分こそが今後、科学的知見として蓄積（解決）されるべき内容であり、研究者自身、それらの内容を社会学者との議論の上で理解し、何が不足しているのかを理解しつつ専門分野での知見を蓄積していくことが大事ではないかと考える。

最後に「決定的な違いは見いだされない」と、意図的に結果ありきで科学的に取り組んでいるのではなく（少なくとも自分自身の中において）、納得の行く手法であるのかどうか、それを吟味しつつ科学的知見（データ）を蓄積しているのであり、もし、地層処分が不可能と考えざるを得ない知見（データ）が得られればそれが何なのかを提示するのも研究者の役割だと考えている。